

## 「ラオスのろう者と手話」

外国手話研究部 池田ますみ  
筑波技術大学 技術科学研究科

### はじめに

筆者は、日本財団および NGO 団体 ADDP(アジアの障害者活動を支援する会)による共同プロジェクトのメンバーとして、2017 年よりラオス手話の普及・啓発活動ならびにラオスにおけるろう教育の向上支援に取り組んできた。これらの活動は、現在も継続して実施されている。

ラオスろう教育向上支援プロジェクトの一環として、国立ラオス教員養成大学における手話講義用教材の整備を目的に、手話言語学者である Woodward 教授(元ハワイ大学)の監修のもと、手話指導教材および辞書の制作が進められてきた。具体的には、『Modern Laos Sign Language Student Handbook 1-3』(日本財団助成)ならびに辞書の制作が行われており、現在までに Handbook 1・2 および辞書 1・2 が完成している。

本稿では、これらの長期的な活動を通して得られた知見をもとに、ラオスろうコミュニティおよびラオス手話の実態について報告する。

### 1.1. 地理

ラオス(正式名:ラオス人民民主共和国)はインドシナ半島に位置するメコン地域諸国の一つであり、ASEAN 唯一の内陸国である。面積は日本の本州と同じくらいの約 24 万平方キロメートル。国土のほとんどが山岳地帯(外務省 2025)。



図1 ラオスの地図

画像:外務省 <https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/laos/index.html>

### 1.2. 基本データ(外務省 2025)

国名:ラオス人民民主共和国(Lao People's Democratic Republic)

人口:758.2 万人(2023 年、ラオス統計局)

民族:ラオ族(全人口の約半数以上)を含む計 50 民族

言語:ラオス語

宗教:仏教

### 1.3. ラオスのろう教育の歴史

ラオスにおけるろう教育の歴史は、1990年にラオス保健省が看護師および療法士5名を、手話学習を目的としてタイへ派遣したことに始まる。その後、1992年に首都ヴィエンチャンに初のろう学校が設立され、タイでタイ手話を学んだ看護師・療法士が教員として教育現場に立った。続いて1996年にはサワンナケート県に2校目のろう学校が設立されたが、校長の逝去を契機として運営が困難となり、2010年に廃校となった。2008年には3校目としてルアンパバーン県にろう学校が設立されている。

2018年には、それまで保健省が管轄していたろう教育が教育スポーツ省へ移管された。この制度変更により、教員免許を有していなかった看護師・療法士らは、退職あるいは医療機関への異動を余儀なくされた(情報提供:ラオスろう協会)。現在、国立ろう学校は中学部までを対象としており、ヴィエンチャン校およびルアンパバーン校の2校が存在している。加えて、2023年には、日本財団とNGO団体ADDPが共同で実施する「第二弾ラオスろう教育向上プロジェクト」とラオス教育スポーツ省との連携により、国立教員養成大学付属ろう高等学校が新たに設立された。さらに、2024年には私立のろう学校(小学部)である *Hands of Hope School for the Deaf* が公式に認可される。それにより現在は4校ある。国立教員養成大学付属ろう高等学校のみ、バイリンガルろう教育法を取り入れている。

### 1.4. ラオスろう者

ラオスでは18県のうち、ろう学校が設置されているのは2県に限られており、教育機関の地理的偏在の影響から、地方在住のろう児が学校教育へアクセスすることは極めて困難であるため、ろう児・ろう者の就学率は全体として低い水準にとどまっており、2015年に実施された国勢調査データによれば、同国の聴覚障害者人口は約69,000人に上ると報告されている。

ラオスろう協会(Lao Association of the Deaf)は、地方に居住する無就学ろう者を対象とした手話教室を開催してきたが、その活動はラオス北部のファパン県に限定されている。そのため、他地域に住む多くの無就学ろう者は、教育や言語支援を受けられないまま放置されているのが現状である。また、国立ろう学校は2校存在するものの、いずれも中学部修了後の進路支援はほぼない状況である。また、ろう生徒の多くは在学中に中途退学する傾向が強く、中学部卒業に至る段階では、在籍者数が3~4名程度まで減少するケースも少なくない。退学した生徒や中学部を卒業した生徒には、進学や就職の選択肢が限られ、家族とともに農業中心の生活に戻るケースが多い。

一方で、首都ヴィエンチャンにおいては近年変化が見られる。一部のろう者が、カフェ、デリバリー業務、清掃業などに就職する事例が増えつつあり、都市部では新たな就労機会が徐々に広がっている。しかし、こうした動きは依然として限定的であり、地方との格差は依然として大きい。

仏教国であるラオスにおいて、教会に通うろう者が比較的多いことが指摘されている。その背景として、仏教の教えを説く僧侶の多くが手話を使用できない一方で、手話によるコミュニケーションが可能な外国人牧師夫婦が運営する教会が存在することが挙げられる。このような

教会では、ろう者が宗教的教義を直接理解できる環境が整っており、結果として、同教会に入信するろう者が増加しているという実態がある。

経済的に自立していないろう者同士が結婚するケースも多く見られるが、出産後の生活基盤を維持することは容易ではない。その結果、子どもを出産したものの、約 9 割の世帯が実家の支援に依存して生活している、あるいは親権を持ちながらも子どもと別居する選択を余儀なくされているろう夫婦が多い状況にある。

## 2.1. 現代ラオス手話

ラオス保健省は、ろう学校設立のため隣国タイへ看護師らを派遣させた(1990 年)背景にラオス語とタイ語は近い家族言語であるため、言語的壁が少ないからである。タイ手話を 2 年間で取得した看護師らはヴィエンチャンろう学校の先生になって、ろう生徒たちにタイ手話による授業を行われてきた。教育現場からタイ手話が現代ラオス手話として広がっていった。ラオスろう協会の調査(2025年実施)によると、2530語彙のうちタイ手話362語としている。両国とともに新しい手話語彙の開発を続けているため、手話表現の違いに開きが広がっている状況にある。また、タイ手話は ASL に影響されているため(Woodward 1996)、現代ラオス手話にも当然、間接的影響をうけているが、その語彙数は不明である。

両国の言語(手話を含む)は、いわゆるファミリー言語として近い関係にある。ラオスでは、タイのテレビ番組、とりわけバラエティー番組が広く視聴されており、多くのラオス人はタイ語の話し言葉を概ね理解している。

では、ろう者の場合はどのような状況にあるのだろうか。一般に、ろう者の多くは自宅にテレビを設置していない、あるいはテレビを所有していても音声中心の番組内容を十分に理解することが難しいため、聴者とは異なるメディア環境に置かれている。ラオスろう協会によれば、タイのろう者は Facebook、Instagram、YouTube などの SNS を積極的に利用しており、ラオスのろう者も、これらのプラットフォーム上で配信されているタイ手話の動画を好んで視聴しているという。その結果、ラオスのろう者はタイ手話に日常的に接する機会が多く、タイ手話に対する理解や親和性が高まっている傾向が考えられる。

ラオス手話には、ラオス語の文字体系に対応した指文字が存在する。ラオス語は母音が 16 個、子音が 27 個と音韻数が多いため、これらを表現するラオス版指文字では、両手を用いた表現方法が採用されている。

## 2.2. 古代ラオス手話

古代ラオス手話の存在については、体系的な記録が残されていないため、不明な点が多い。Woodward(2010)は、古代タイ手話とラオスにおける土着の手話が混交した形態が、過去に存在していた可能性を指摘している。

筆者が首都ヴィエンチャン在住のろう高齢女性に対してインタビューを行ったところ、数件の手話表現において、Woodward が調査・記述した古代タイ手話と酷似する表現が確認された。この所見を踏まえ、Woodward 氏、筆者、ならびにラオスろう協会関係者は、コロナパンデミック以前の 2019 年に、ろう高齢者の実態把握を目的として、隣国タイの国境に接するラ

オス北部および南部地域において共同調査を実施した。

その結果、多くのろう高齢者が社会的に孤立した状態にあり、地域的なろうコミュニティの存在はほとんど確認されなかった。このため、当該調査においては、Woodward(2010)が示唆するような手話の継承や集団的使用の実態を実証的に裏付ける証拠を得ることはできなかった。

### 2.3. 手話言語法について

冒頭の基本データで述べたように、ラオスには 50 民族が存在する。ラオス政府が民族言語として公認されているのは今の時点で、モン族である。

障害者権利委員会(CRPD)からは、ラオス政府に対し、手話言語法の整備および手話通訳者制度に関する指摘がなされている。これを受け、ラオス政府は、少数民族言語を含む言語認定の基準として「約 3,000 語彙の保有」を要件としており、ラオス手話についても同様に 3,000 語彙に達することが求められている。現在、ラオス手話はこの基準に対して約 500 語彙が不足しており、新たな語彙の開発が重要な課題となっている。こうした状況を踏まえ、国立ラオス教員養成大学附属ろう高等学校では、正規の教科の一つとして「ラオス手話科」を導入し、ろう生徒と協働しながら新しい手話語彙の開発に取り組んでいる。

### 2.4. ラオス手話の文法

ラオス語の基本語順は、主語(S)—動詞(V)—目的語(O)である。一方、ラオス手話においては、SVO 型と SOV 型の両方の語順が観察される。まず、ラオス語の語順と一致する手話表現の事例を2つ示し、続いて、ラオス語とは異なる語順をもつラオス手話の事例を4つ挙げる。

#### ラオス語の語順と一致した手話表現の事例

<彼女が彼をぶつ>

ラオス語	／彼女／ぶつ／彼／
	nang tii lao
ラオス手話	／彼女／ぶつ／彼／
	S V O

<彼女はテレビをみる>

ラオス語	／彼女／みる／テレビ／
	nang berng tholaphâap
ラオス手話	／彼女／みる／テレビ／
	S V O

## ラオス語とは異なる語順をもつラオス手話表現の事例

### 平叙文<わたしはマンゴーを食べる>

ラオス語 /わたし/食べる/マンゴー/  
Khòy kin màak-mûang  
S V O  
ラオス手話 /わたし/マンゴー/食べる/  
S O V

### 否定文<わたしはマンゴーを食べない>

ラオス語 /わたし/食べない/マンゴー/  
Khòy bor-kin màak-mûang  
S 否定形-V O  
ラオス手話 /わたし/マンゴー/食べない/  
S O V-否定形

### 疑問文<あなたはマンゴーを食べましたか>

ラオス語 /あなた/食べる/マンゴー/した+か?/  
chao kin màak-mûang leo+bor?  
S V O 完了形+否定形  
ラオス手話 /あなた/マンゴー/食べる/おわり?/  
S O V 完了形+眉上げ

### 完了形<わたしはマンゴーを食べた>

ラオス語 /わたし/たべる/マンゴー/おわる/  
Khòy kin màak-mûang leo  
S V O 完了形  
ラオス手話 /わたし/マンゴー/たべる/おわる/  
S O V 完了形

## 2.5. マウジング(口形)

首都ヴィエンチャン在住で、中学部まで教育を受けたろうの若者においては、マウジングの使用が比較的高頻度で観察される。

<DAI>あるいは<DAI(can)+BOR(否定)>は、「やってもよいか」「お願いしてもよいか」といった許可・依頼のニュアンスを表す口形である。例えば、机が不安定であるため金づちなどの道具を借りたい場面において、話者は/DAI?/あるいは/DAI+BO?/とマウジングしながら「よいですか」と許可を求める表現を用いる。

続けて/DAI?DAI?/は、いいよね?という意味合いがある。

<LEO(完了形)>は、「すでにやった」「済ませた」「終わった」といった完了のニュアンスを表

す口形である。例えば、教師が生徒に対して「宿題をやったか」と質問する場面において、生徒は／LEO／と口話しながら、手のひらを上から下へひねる動作を伴って「やった」と表現する。このほかにも、＜MI＞(ある・持っている)、＜YU＞(人がいる)、＜YAN＞(まだ)といった口形が確認されている。これらの口形は、特に若いうちの間で好んで使用される傾向がみられる。

今後、ラオスにおけるろう教育の向上が進むにつれて、語彙や表現の複雑化に伴い、使用される口形の種類もさらに増加していくことが予測される。

## 今後の展望

ラオスにおけるろう教育の向上に伴い、今後、タイ手話との手話表現上の差異は、次第に拡大していく可能性があると考えられる。教育制度の整備や教材の統一は、手話語彙や表現形式の標準化を促進する要因となり得るためである。また、Woodward(口頭、2019)によれば、かつてアメリカ手話(ASL)はSOVを基本語順としていたが、ろう教育の発展や教育現場での使用状況の変化により、現在ではSVO型の語順へと変化したとされている。この指摘を踏まえると、ラオス手話においても、今後の教育環境の変化に伴い、語順に変化が生じる可能性が考えられる。本研究では、こうした観点から、ラオス手話における語順の変化について、今後も継続的に観察・分析を行っていきたい。

## 参考文献

外務省. (2025). ラオス人民民主共和国.

<https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/laos/index.html>

Woodward, J. (1996). Modern standard Thai sign language: Influence from ASL and its relationship to original Thai sign varieties. *Sign Language Studies*, 91, 227–252.

Woodward, J. (2010). Some observations on research methodology in lexicostatistical studies of sign languages. In *Oxford handbook of deaf studies, language, and education* (pp. 38–53). Oxford University Press.

ADDP. (2023). *Modern Laos Sign Language student handbook 1*. Nippon Foundation. (印刷中)

ADDP. (2025). *Modern Laos Sign Language student handbook 2*. Nippon Foundation. (印刷中)